

「愛情」が貰えなかった男の物語。

幻想入り専門家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「愛情」とは何か？、それは、人から愛された時に受け取るもの。そして、もしもその愛情が無ければ人の心は空っぽのままなのだ――

なら……幻想郷に行つたほうが良い。彼処ならば、全てを受け入れてくれるのだから、……

「――これは、1人の青年の物語。愛情を知る物語。皆様も、1人の青年の運命を見て行きましょう……では――ごゆっくり。」

# 目次

幻想郷へようこそー	1
「母性」に甘えられなかった者。	8
希望の光。ー前編ー	14
第4話	20
希望の光。ー中編2／2ー	27
希望の光。ー後編2／1ー	33
第7話	42
igorとの出会い。	50
主人公組の絆と一筋の希望	56

## 幻想郷へようこそー

「虐め」…それは相手を痛めつける行為である。そしてそれを大人は止めていた。…だが、偶に教師や隣人、又は親が行う場合がある。

ー…それを人は「幼児虐待」と言った。

ー…だが、それを止めてくれる人がいなかったら？友達からも、知り合いからも、家族からも。

「…そんなこと、俺には、耐えられない。」

そして、足で地面を蹴飛ばし崖から飛び降りた。次の人生が良くなると信じて、。

---

ー第1章ー全てから拒絶された男ー

---

「づつ、、頭が、」

ひどい頭痛で目が覚めた。あまりにも痛い為か、周りがぼやけて見えていた。そして、ゆっくりと視界が戻ってくる。

「どこだ、？…」

周りに見えるのは、「霧」だけだった。そしてその霧は晴れる事なくずっと曇っていた。

「おーい！、誰かいないか！…ーッ？！」

先程の頭痛が強くなり、立てなくなる。

「ぐづつ!!あぁ”っ!!」

頭が殴られた様に痛い・痛い・痛い…。涙を流しながら頭を掴む。

…そうした瞬間だった。

「ッ!?!、夢、?、」

目の前が明るくなり、全く知らない場所にいた。

「一体どうなってるんだ、？、良くわから、！？」

そう、”全く”知らない場所にいたのだ。自分の家とも違う。

知人の家とも違う場所に…。

「ハハッ、夢なら覚めてくれ。頼むから。な？」

怖いという感情ではない。色々あり過ぎて可笑しくなっただけだった。そして夢じゃ無いか確認する為にある行動をとる。

「ふにー…イダッ！」

痛かった。

「じゃあ、夢じゃないのか。どこなんだ？ここ。」

広くも狭くもない和室。明らかに誰か住んでいる感じだ。（部屋の電気ついてるし。）

自分の右腕には包帯が巻き付けられていて、布団の上で座っている事が分かった。

「ままあ、兎に角誰かいなか呼んでみないとだな。おーい！誰かいませんかー！」

「はーい！今行くわよー！」

とても透き通っていて、美しく声が帰ってきた。少し、ドキツとしながら女性を待つ。

「（綺麗な声だなあ。誰が来るんだろ、。）」  
シュツ、。

「ああ、起きたのね。おはよう。」

……そこにいたのは般若のお面を掛けた女の子がいた。

「えっ、はあ、おはようございます、？。」

混乱している。とても混乱している。絶対に顔が綺麗な女の子がお面をして話をするのはどうかと思う！っていうより話していると吹き出しそうなんだけど!?

「…あら？私の事を見ても逃げないなんて凄いで胸ね？」

腕を組みながらそう言う少女は、近付いてくる。

別に自分は何の度胸も必要がない。逆に、近づけば近づく程、ドキドキが強くなっていた。

「…………ふう…………ふう…………はあ、…、」

突如…お面の内側から声が聞こえる。その音は近づくとたびに大きく強くなっていることが分かった。

「大丈夫ですか?。」

近寄って来る少女にそう言う。

「…………えっ?…………あつ、な、なんでも無いわよ!?!、」

お面越しからでも照れているのがわかる反応をした。(耳も赤くなつて居た。)

「本当に大丈夫ですか?、、」

俺は顔が赤い人には必ずある行動を取る。理由は熱が無いか確認する為だからだ。

スツ、コツン。

ー…俺は仮面を取り、額に自分のを当てた。ー

「ー…ツ、?!?!」

「ー…良かった。熱はなくて、…。」

まさか、この言葉をかけたただけであんな事になりなどこの時の俺は知る由もなかった、…。

「…………暇ねえ、…。」

彼女の名前は博麗霊夢、一応この幻想郷を守る人物だ。他にも何人かはいるが今は気にしないでいいだろう。

「あ、パトロールするのを忘れてた。」

彼女はいつも昼ごろになるとパトロールをする。それは彼女の仕事でもあるからだ。基本、博麗の巫女は「人」と「妖怪」の秩序を守る事。だが、彼女の場合は暇だからの方が多し。

「…うーん、今日はなんか勘が「行け」って言っている気がするのよねえ、…。」

基本的に面倒くさがりやの彼女は余り動こうとしない。誰かに任

せっきりの方が多い。……じゃあ何故皆んなから好かれているのか？…それは彼女の実力もそうだが、「勘」が理由だ。

普通の人の勘は五分五分で当たるが、霊夢の場合、9割の確率で当たる。そして、何より戦闘能力が以上に高いだからだ。

「行くこうかしらね、。」

勘は霊夢の主な潜在能力だ。だから大体信じていれば当たる。

「、ん？、何アレ？」

視線を横にすると、人が倒れているのが見えた。

「え”、、死人、？”」

少々嫌な顔をしながら近づいて行く、そして顔が見える位置まで行く”と、。

………自分の目を疑った。………

「お、お、お、男オオ!? しかもイケメン!?!」

そう、目を疑う程の綺麗な顔をした男が倒れていたのだ。神社の傍で。

「う、あ、あ、ど、どうしよう、。理性が、。」

手汗がやばい状態で、ゆつくりと男に近づき体を揺すいだが、まだスヤスヤと眠っていて起きなかった。

「…しようがないわよね、。起きないのが悪いんだし、。」

ゆつくり、ゆつくりと、近づく。そして男の手に触れた。

「(うわあああゝゝ!!!触れちゃったアア!!!)」

二度と触れる事の無かった「男」の手。しかも、今まで見た事無い位の綺麗な顔立ちをした男の手。彼女は自分の理性を封じ込めるだけで精一杯になった。

「(…フンツ!!…私には…やるべき事が、あるのよー!)」

…それを、力づくで押し込める。

「はあ、はあ、はあ、ふう、。さて、。どうしようかしらね?、。」

「(力づくで神社まで持って行く?、。でも、)」

博麗神社は、かなりの人が集まる。そして稀に賢者まで現れるとな

ると些か危ないのだ。

「(、あつ、そうだ!。この人が起きるまで待てば良い話よね。アイツが来ても追ひ払えば良いし。)」

よし!、と言う顔をしながら浮遊させ神社の中に入って行つた、。

oooooooo

まあ、そういう訳で、。連れてこられたらしいのだが、。

「ーは〜いーアーン♡」

……ど・う・し・て・こ・う・な・つ・た・?

腕も使えてる。足も首も全て動くんだ。だが、何故だ? 口元に料理が運ばれるのは?。嬉しく無い訳では無い!。自分の感情は恥ずかしさしか無い!!。

……ん?、なんでこうなつたかつて?、教えてやるよ。そう……

---

ーこれは、回想に入る前の出来事の話。ー

スツ、コツン

「えっ、……」

頭に当てられた一つの感触。その光景に私は見覚えがあつた。ーそれは……本。

前、魔理沙が持つて来た、：一つの本。名前は少女漫画というらしい。私は、その内容の一つを思い出す。

内容は、少女が熱を出し、知り合いの男性が見舞いに来るシーンだった。男性は無言のまま近づきー



……額を当てた。……、そう。今と似たような形で、。

……私は、そのシーンが一番好きだった。自分もこんな事されて見たいと思った。、だけど、無理だとも分かった。自分は「醜い」と、分かっていたから、。

……その無理だった事が、今、起きている。しかも里の人達よりも綺麗な顔立ち男性が、私に対して、。

そう分かった瞬間。……私は「壊れた。」  
……、

「……う、ん、」

「……嬢、さ、」

「……お嬢、さん、」

「……お嬢さん!!」

「……」

「どうしたんだ、一体、?。」

俺は、座り込んでからピクリともしない女の子に声を掛け続けていた。だが、

「……」

「……全く、動か無かない。」

「うーん、どうした、ら、ん?。」

……筈、だった、。

「ん、んん、。あ、あ、。」

突然に目を開けた。そして、よく見ていなかった俺は今気付く。

「(び、び、美人!?!マジかよ!?)」

……その顔立ちに惚れている時だった。

「(と、兎に角。こえ……ガバツ”!?)」

……突如。女の子に抱き着かれた。何が起きたか、それは直ぐには理解が出来なかった。

「だあーい好き!!お兄ちゃん!♡」

「、は、はああああああ!!?、。」

……いきなり抱きついた子の名前すら分からない俺。そしてこれが、満面の笑みの女の子との出会いだった、。

T  
o.  
b  
e.  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

「母性」に甘えられなかった者。

…人というのは、絶望感を抱き過ぎると感情が薄れる傾向がある。――それは精神的にも強い彼女らでも同じ事だった。

…まず、そこまで耐えて来た彼女達が「特殊」と言える。だったら、その「特殊」でない場所、土地から来た彼はどうなるのだろうか。

精神的に弱い人も居る、それは当然のこと。……いや？、それなら特殊と言えるのだろうか。本当に、も誰とも関わりの、無い、この青年は。

「愛情」というものを一度も貰った事がない。誰からも、そう…誰からも…。――だから”こそ”だったのだろう。

――彼女達の母性に触れ、甘えたのは。

………可愛い。

「すう、う、」

…膝の上で先ほど抱きついて来た女の子がスヤスヤと眠っていた。自分として初めての感情。考えだったが、口にだしてもとてもしつくりくるものだ。

「ん……でも、どうするかなあ、まあ、でも…」

「―起こす訳にはいかないよ、な」

人形のようにスヤスヤ眠って居る姿を見て、直ぐに起こすのは少々悪くおもえる。(別に時間は幾らでもあるのだから、少しは大丈夫だろう)そして、俺はそんな風な考えをしていた。

「時は流れ、昼頃――」

スス、チラツ、

「まだか、眠たかったのかな？」

今の時間は一時。先ほどから二時間は経っている。だが、まだ一向に目を覚まさない。心配にもなってくる。お昼を作り終わり次第起こすつもりだから問題はないと思うが、

「…ん、？…風がいきなり強くなった？」

窓を開いていたからわかったが、何故かいきなり自然的ではない風が流れて来た。まるで、大きな物体が滑空をして居るかのような不自然な風が。

それが気になり、作業を止め外に出る。

〈調理場↓縁側〉

「え、何だ、アレ」

黒と白の肖像服がまず目に入り、それと同時にあの女の子とはまた別の美しさを持った、少女が見える。他に分かる事といえば見た目が、さながら昔から聞く「魔女」と言う存在に似て居る事だ。

「おろ？、何だ、博麗神社になんか用か？」

…あと、思ったよりジジくさい女の子だ。(失礼だが。)

「えっと、何だか迷ってしまつて、気が付いたらこの神社が見えたので。」

「もしかして、外来人の人か？」

顔を息が掛かる間近まで近づいていた。それだけでなく、じろじろと身体の節々を見て居る為、少しづつ後ろに下がりながら質問答えを探す。

「外来人？、何ですかソレ」

今思い出すと、あの子とははつきりと話していない為、分からない事が多かった。

「何だよ、霊夢は教えていなかったのか？ダメダメだな」

あの子の名前は霊夢と言うらしい、初めて知った。多分まだ起きないのだろうし、この子から聞いてみようか。

「兎に角、中に入りませんか？、丁度、何か作っているので食べながらでも。」

「おお！それはありがたいぜ☆」

見た目に反して、とても落ち着いている子だ。…というより今考えると、勝手にキッチンを使ってる俺の方が常識知らずな気が……

〈縁側↓居間〉

「はいどうぞ。お気に召すかわかりませんが。」

「ははは！似合わねえぜ?!」

「(・ω・)(ヒドイ)」

ボケをかましながら作った料理を机に置いていく。チラリと女の子の目を見ると、とても興奮しているようだった。俺も：料理を嗜み程度で覚えていたがやはり人に喜ばれるのは嬉しく思うものである。

「あつ、そういえば名前を聞いていなかったな。なんて言うんだ？」

「俺か？俺は：「朝吉羅 焔」だ。よろしくな」

「へえ、珍しい名前だなあ、私は霧雨魔理沙だ！よろしく焔！」

「ああ、それより食べませんか？冷えちやうし。」

「いや、私語になるんならそのままにしろよ。それに気持ち悪いし。」

「(気持ち悪い……)ー……まあ、そういうのであればわかったよ。魔理沙。」

「あ、つ、：ああ！」

食べながらだが、俺は此処の事を聞いた。そして：聞いた所、俺の予想どうりの場所だった。そして、普通の人間である俺がこの世界で生きていくためには、とても強くならなくちゃいけないらしい。

：という訳で、

「オラオラー！どうしたあ焔!!このままだと傷だらけになっちまうぜエ!?!」

「クソつ、」

：魔理沙に特訓をしてもらっている。魔理沙の放つ弾幕と呼ばれるものに、どうにか当たらないように避けるが密度が高すぎて当たってしまい、傷を負っていた。

：何も持たない人間に、異世界の技はとても厳しく残酷なもの。：しかも、これはまだ魔理沙の力のほんの一部。：この世界では力が正義と言っていたが、どうやら本当のようだ。

：そして理解する。確かに人間では生き延びられるのは無理だと。どれだけ頑張ってたとしても：という諦めに入っていた

「うぐっ！、はあはあ、」

自分から頼んだとはいえ、気力も限界で止めてもらおうように言おうと思ひ声に出そうと思つた。

…その時。

「…何なのよ、煩いわねえ、」

先程、俺に抱きついた女の子が障子を開け、縁側で目を擦っている。  
…それに気付いたのか、魔理沙が弾幕を止め女の子の所に向かって箒で滑空していった。

「霊夢、まだ寝てたのかよ。」

「ん？、ああ、魔理沙か、いつから来たの？」

「さつきからだぜ。」

「いつよ、それ…」

—などと言うコントしていた時、偶然にも女の子が目をこちらに向け、…目が会う。

「っ!!、」

「(な、何だ、)…」

それから、…こちらに大して虚ろな目を向け歩いてくる。まるで、糸の切れた人形のような済んだ目を向けながら。

—…そして、それに反応ができなく。気づけば目の前まで来て抱きつき押し倒され、抱きしめられていた。

「…..やん。」

「(え?、)」

「お兄ちゃん!♡!」

….

—…という訳なんですよ…。さらに言うと、この後「八雲 紫」：という人が来て、何があつたかと脅されましたね。ハイ(俺、何にもしてないのに罰とか言われ、御飯つくらされるし、)

「へえ、なら霊夢はどうなるんだ、紫」

「まあ、なんにも出来ないわね。この様子だと」

この様子とは、今俺が霊夢に（また）抱きつかれている現状の事である。1人は羨ましそうに霊夢を見、また、もう一人は明後日の方向を向いていた。

「どうにかできませんかね…」

「…霊夢、羨ましいぞ…」

外から来た人間と霊夢は妖怪の賢者と話をし、一人として残った少女は、とても寂しげな顔をしながら外の景色を見ているのであった。  
…、…、

・ 我は汝…汝は我…

・ …汝、ここに新たなる契りを得たり。

・ 契りは即ち。

・ 囚われを破らんとする反逆の翼なり。

・ 我、「幻」の絆の生誕に祝福の風を得たり。

・ 自由へと至る、さらなる力とならん…

・ コミュニティ：「幻想郷」を得た。

・ 左目のスロットが埋まった。「幻」rank 1

…、…、

…あれから数時間が経ち、夜を迎えようとしていた頃。俺は霊夢が正気に戻り、帰ろうとした時のことを思い出した。

…あれは、数時間前のこと。二人から聞いたことを元に帰ろうとして頼んだ時だった。（…何故か、二人はめちやくちや不機嫌そうな顔をしていたが…後霊夢も…てか、何故か皆んなお面つけていたな。…何でだ、？、今はいいか）

「お姉さん、…貴方が出ていけない理由は分かりません。私が何とかしてみますが、とてつもなく時間がかかるかもしれない。それでも出ていけないかもしれませんので、それだけは解ってもらえますか？、…」  
これを聞いた時に思った。…そりやそうだと。こんな事は初めてらしいし、こちらよりも彼方の方が困っているだろうと。だから、「大丈夫ですよ、俺は気にしてないので。まあ、未長く待つとしますよ」

…などと、言ってしまった。本当は怖くて不安でたまらないのに。

「そう…ですか…、私達もできるだけ早くします。それまでは私の神社で寝泊まりをさせて頂いてください」

何故か考えていることが知られているような気分だった。多分、とても凄い子なのだろう。この雰囲気といい、この目は。…その時、俺はそう思った。それから紫さんが入り…とまあ、こんな感じ

でも…それでも…今まで味わって来た虚無に比べたらとても軽く感じる。

「…だから、俺はこの世界で、生きていこう。」

…そう呟いた感情。夜の静かな空間にポツリと響いた力の入った言葉。そこには、とてつもない決意と想いが込められていた。

「明日から、色々と聞いてみるか…強くなれる場所を見つけなきゃな」

”何時もと違う”…最後に思ったのはそんな呆気ない事だったと思う、

To . b e . c o n t i n u e d . . .



## 希望の光。――前編――

……ここは境界の間、私、八雲紫の部屋。いつもここで色々な境界の管理をしている。何か不具合が無いか確かめる為と、非常自体に備えて……だ。

何時もなら殆ど結界に変化は無い、あるとすれば結界のズレ……だけれど、今回ばかりは違った。

……結界に人一人分の穴が開いていたのだ。しかも、開いていた穴も特殊であり、……破れてもすり抜けた訳でも無いような型の開き方をしている穴。……ならば一体どうやって入って来たのだろうか？、

……「幻想郷」ありとあらゆるものを受け入れる場所。それは時に残酷なものであり、苦痛なもの。だからこそ、入って来るものを拒むことはできない。それが幻想郷の掟であり、ルールだからだ。

……だけれど、入って来たものが黙って幻想郷を壊していく様は見たくない。もし、そうでなくても少しでも危険と思えるものは種を取るか、監視するのがいいだろう。

……だから調べた。結果、結界を通り抜けた人間が博麗神社にいることが分かった。結界を超えた時に落ちたのかは分からないが、その近くに落ちていた破片があった結界の一部のものと分かった事が一番の見つけられた理由だろう。

そしてそれが分かった途端、私は博麗神社にすぐに向かう準備をする。ありとあらゆる武器を持って……

お面は外して行こうとは思った。だが、私の顔を見る事によって相手の殺気をたかならしては意味がないと思い、近くにあったお面を勢い良くかぶる。

少しでも未知の相手に警戒をされない為に。少しでも相手の気を緩める為に。私は、いつも通りの格好をしてスキマに入っていく。目を強張らせながら……

一体どうやって入って来たのかは本人から聞いた方が早いし良い、……だが、もしも知らなかった場合……監視を続けるか殺すかのこの二つ。

まずそんな事を言っても分からないのだから行って確かめて見ないことには変わらない。だが、思いがけない強敵ならば霊夢や魔理沙を使うことになるだろう。…と、そんな事を考える間にスキマの外が見えて来ていた…行き先は「博麗神社」。…そして霊夢のすぐ隣にスキマで映し

…ゆっくりと降りたつた。

「うおっ!?!、紫…」

…よく聞く魔理沙の声、其れを表示に目を開けた。…目を開けて周りを見渡す、其れを私はしてしまった。そう、そこに居たのは…

「っ、(余りビクツとは来なかったな、と言うかまたお面か、ツッコマナイデオコウ)」

霊夢ではなく、

「…っ…う、ああ、あ…」

「？」

「(…紫、良く耐えたよ、お前は。)」

…太陽のように光っている人間だった。その光は私にとって眩しくそれでいて優しい光。私は其れに見惚れてしまっていた。

…そして、私は気づく。霊夢が居ないことに…

「え、あ、そういえばここは霊夢の神社よね？肝心の霊夢はどこに行ったのかしら？」

「…うん？霊夢ならそこにいるじゃないか、ほら」

魔理沙に言われ近くを見渡すと仰向けになったまま動かない霊夢がいた。相変わらず不細工な顔をしている。まあ、魔理沙もそうだが

…

「…えっと、その貴方、とりあえず何があつたか教えてくれる？」

「あ、はい、」

…で、気になり内容を聞いた結果…手を額に当てて倒れたと言われた。霊夢自身を知っているがこの中で一番男慣れをしていない、其れなのにそんな顔でそんな事されたらそうなくても全くもって可笑しくないだろう。まずそんな霊夢が顔をみて気絶をしなかっただけでも成長したと言つていい。

「ところで、貴方はこれからどうするのかしら？何なら私が幻想郷を案内をするけど」

「うーん、どうにかして帰る様にはできないのでしょうか？」

「(！)、何故？」

「そうだけ？。姦、無理に帰る事はない」

「まあ、そうなんだけどき：何か此処に来る前の事を思い出そうとすると頭が痛くなってね、気になるんだ。」

私はこの話を聞いた時に一つの話の思い出した。：これは前に聞いた「記憶喪失」だと。：症状としては似て違う所もあるが、「思い出せない」という所を見ていくとあてはまっているだろう。だがまだ完全ではない、だからまだ大丈夫だとは思うが。

「何だ何かの病気か？私には分からないぜ、」

「私にも分からないわよ、答えの結論から言う「出たい」という事でしょ？。それならそこで眠っているひとから聞いた方が良いわね」

「何でだよ、紫なら連れて行けばいけるだろう？」

「(空気読めよ!?)：無理よ。今の私じゃ力がでないもの」

今は冬。私が最も、力の落ちる時。だから口実にはピッタリだった。：それと同時に、(もしもこの人が幻想郷にいられるとしたら、私達の事を救ってもらえるのかしら)：と、そんな事を考えていた……

、私の名前は霧雨魔理沙。特徴としては男が苦手、何故なら：顔や体の事で虐めてくるから。それが嫌で私は、魔法という大きな力を手に入れた。：太刀打ちできるように：負けない為に。

霊夢も多少そうだった、だから私の話や紫の話をよく理解してくれてアドバイスをしてもらった。とても嬉しいかった……けど、私も女の子。嫌いと言ってもやっぱりに惚れた事も何度もある。

：だけど叶わない：何故なら、「醜」から。：幻想郷の中でトツプクラスに醜い私がどうやってモテるのだろう……：そう思っていたら何時しか恋愛という感情が無くなっていった。



…？」

この人は優しい。私の体を見ても暴言を一切口にしないし、現にしていけない。それに、弾幕の話をしたら「…教えてもらえないかな？」なんて言っただけだ。だからとても驚いたよ……驚き過ぎて転んで足を痛めた程。

…だから「こんな人が多く入れれば」と、思った。それと半面に、何時かまた嫌われるのだろうか思ってしまう。「こんな人がする訳ない」…そう思っても、「分からないだろ!!」と言う反抗的な気持ちがあった。

女というのは家畜の様な存在、それが嫌なら死ぬ気で強くなるしかない。今はいい顔をしていても私の扱いを聞いて心を変えるかもしれない、…だから私はこの男の事を信用できない。

当たり前ではないだろうか？…女は男に絶対勝てない。それほどう足掻いても無理な事だ。

「そうだぜ？…あ、無理に帰ることはない」

…でも、この男は帰らせたくなかった。

だけど、信用はできない。けど、この男と一緒に居たい。そんな気持ちがあった。何故なら、…あは必ず私達を助けてくれる…そう思っていたから。

そうだ…こんな人が入れれば私達の事を助けてくれるかも知れない。だけど、相手は帰ってしまう。どうしたらいいのだろうか、

…だけど…帰るとするなら私は最後までいておこう。こんな顔の整った人はいないのだから、少し位は心を癒しておきたいし。

…

(え？…帰れてない、？)

…結界を通ろうとしていたら通れていなかった。何が原因かはわからないが、異常事態なのは確かだ。今までこんな事例は見た事も聞いた事もないのだから…。

「私が行ってくるわね、…それと、魔理沙も同じ事を考えているの

だとしたら好都合じゃない？…、この状況は…」

霊夢達に向かって行く紫にそんな事を言われた。最初は分から無かったが、…すぐに理解する。

「(…ああ…お前もおんなじ事考えてるんだな)」

、紫の言いたかったのは…、

…「(私達の事を救ってもらおうと…)」…

…「(…頼みに行くんだな？…)」…

、 「助け舟が来た」 そう言いたかったのだろう…。

――第1章・完――

、、To·be·continued、、

## 第4話

――第2章亡くしたモノ――

……人々が私を恐れ逃げて行く。

……私がそれを殺す。

……それに悲鳴と悲痛が聞こえる。

……そして私が笑う。

……これで私を虐める奴はいない、……苦しめる奴もいない、何故なら皆んな私が殺したから。皆んな皆んな殺したから。

……でも、足りない、こんなもんじゃ、……

――殺す――

――男を――

……暗い暗い闇の中、狂った表情を浮かべながら満月を見る少女を月は白く照らしていた。……

……博麗神社の縁側、日がギリギリ登らない時間に一人の男が座っていた。  
「……うん、やっぱり思い出せない。」

薄暗い闇の中、そう呟き上を見上げる。

「どうしてかな、これからもっと無くなって行く気がするの……」  
俺は起きてからと言うものの長い時間、記憶を思い出そうと頭を回した。だが……覚えている事はどうでもいいことばかり……一体何が不安定なのかはわからない、わかるのは断片的に記憶が消えていつて  
る事、それだけだ。

……記憶喪失にでもなってしまったのか？……

……いや、それはおかしい。なら何で魔理沙が喜ぶ顔を見た時にこちらも嬉しくなり自然な笑顔が出たのだろうか？……慣れというものか

らでも来ているとでも言うのだろうか。

ー…少しづつ考えていこう。…ー

まず一つ。「昔の事を思い出すと頭が痛くなる」何故頭が痛くなる？普通の記憶喪失ならそんな事にはならない。だけど俺はそうだった。…だとしたら自然的なものとは言い難い。この事から推測されるのは、

…① ① 任意的に記憶を消したものがいる。

…② ② どこかに頭をぶつけた。

…③ ③ 元から無い。

ーこの三つ…その中で一番怪しいと思われるのは①。何故ならこの世界には妖怪やら神やらが居るから誰かがやってもおかしくは無い。まあ、でも証拠が見つからないので断定は出来ないな。…これらは先に行けばわかるのだろうか。

…そんな事を思いながら緩い足取りで部屋に向かっていった…

…朝日が昇り、体に光が差し込む。

…そのあとすぐに部屋に戻り竹刀が無かったので箒を持って外に出ていた。…強くなる為にも、守る為にも。…武器の事を知っておいた方が良くと思ったからだ。

「ふっ、はっ、おりや、」

そして、今日から始める事にした運動…それは「素振り」。剣を振るう時の動きを頭に入れる為に目標の千回を目指す。少しでも「妖怪」と言われるものに対抗できるように、体を鍛えていく。

「あっ、そう言えば能力的なものがあるって言ってたよな…、もしかして、俺にもあるのか?？」

その事を聞いた時には魔理沙しかいなかった。そういう能力的な事を知る為には霊夢か紫さんにしか出来ないと言う。…今は丁度二人居るので聞いてみるのも良いかもしれない。

「…あ、…時計はどっかあるかな?、」



今はそれよりも朝食を作るための準備をしよう。後から色々分かるだろうし、

〈庭↓調理場〉

「うしっ！できた」

……とは言つても野菜カレーだな。

「……暇になったなあ、どうするか…素振りをす「ガラツ」

「…おはよう、…眠いわあ、」

入って来たのは紫さんだ。どうやらカレーを作った事が分かるらしい。鼻がいい人だな。……と言うより少し驚いたんだが、

「…朝からカレー?」

「大丈夫ですよ、胃が重たくならないように作ってますんで。」

「そうなの。…ん、それってどうやってやってるのかしら?」

「…と言うと?」

「ほら、肉とか入れたりとかしたらどうしてもお腹に来るじゃない?

ああ言うのって、」

「うーん、肉とか刻んだ時に………」

……話をして霊夢達が起きる

まで待っていた時に一つの事を思い出す。

「…あ、そうだ紫さん、」

「何かしら?」

「…魔理沙と能力的なものがあると聞いたのですが、自分にもあるんですかね?」

「…知りたい?」

「はい」

「、じゃあこっち向いて頂戴」

言われた通りに紫の方向に顔を向ける。

「………」

額に手を当てられるその手は白く冷たいものだった。

「、無い」

「…え?」

「だから、無い」

「・・・絶句」

「口で言うのそれ」

・・・おいおいまじかよ、能力的なもの無いのかよ。俺はタダの一般人だぞ?、鍛えて行くしか無いか。

・・・そんな考えをしながら、紫の方を見た時だった。

「…ねえ、 茄さん。…貴方は私たちをどう思うかしら?」

…突然にそんな事を言った時の顔はその表情は先程とは違く、それでいて真剣な言葉で言われた。…このことの質問の意味はよく分からない。だけど、その目が訴えて居る事を絶対にボケで返してはいけないと思った。…でも何を聞かれて居るかは分かっている為、

「…どう、とは?」

と、答える。

「…醜いとかは思わない?」

「全く。…その逆なら思いますけど」

そう答えた時、紫さんの目の奥に一つの光が見えた気がした。、俺に何かの期待をしていると言うのか。

「そう…その言葉を聞けてとても安心したわ、ありがとう」

それだけ言うと、魔理沙達のいる部屋に向かって行った。

…正直何だったのかは分からない。でも、自らの口で「醜い」と言った時、紫は泣いていた。…多分、何かしらの理由があるのだろう、それならば霊夢の言っていたことも当てはまる。

「まあ、今は自分の事より他の人の事を聞いてみようか」

とは言っても、自分の事を知る人などはいないので、そうする他ないのだが。

「心理状態が分かるのは良いな。良くやった。記憶のない俺よ」

真顔でそんな事を呟きながら皿に盛り付けをし、三人の方へと向かって行った…

……あ、そうそう。因みに霊夢は調子が戻った。というより前よりも調子がよくなっただけだし、俺にした事は覚えていないみたいだ。……魔理沙が言うには表情も豊かになったとも言っていた。……良い事だと思ふな。

「んで、どうするよ、おは帰れないみたいだし」

「まあ……でも仕方が無いし、」

「……その事なんだけど」

「(言うのか。早いな、)」

「……おはさんに私たちの心を変えて貰おうとは思わない?」

「俺、がですか?」

「……そう。貴方は現に霊夢を変えている、何故なら顔を見たら分かるでしょう?」

「……いや、あの。顔が見えないんですけど、」

「……だーれも突っ込まなかったから言わなかったけど、普通に考えて仮面をつけて歩くのはおかしくないのか?三人つけてるんですけど。」

「ゴホッ、」

「なら、まずこのお面の事を話しましょう、魔理沙か霊夢からは聞いてるかしら?」

「(無かったことにした、) 無いですね。」

「そう、これは……」

「……、……これはある人の話。……私たち「女」は大昔から「家畜」の様な存在だった。男の事を聞くのが私たち女の仕事、だから……殴られても……蹴られても……はたまた売られても誰も否定をしなかった。……と言うよりできなかったの……何故なら使命を果たす事をしなければ私たちは殺されてしまうのだから。」

「……だから力を付けた。男にも負けない力、それらを身につけたのは私や霊夢、魔理沙の様な存在。」

「霊夢は元から強く。魔理沙は努力で這い上がり。私はあらゆる事をやって「汚名」を手に入れ、しのいで行った」

「……でも、人里に入る事は許されなかった。」

「……女は美人出なくては存在理由が無い。それでいて私たちはとて

も醜く腐臭のするもの。”そんなものを入れさすわけにはいかない  
”と言われた。

…だからとはいえ、私たちの食料を手に入れる場所。私はどうにか  
なるにしても他のもの達はどうする様にも出来ない事。…それで提  
案したのが、

「…顔を隠すお面、って事ですか…」

「そうね…お面を被る事が私たちの決まりの様なものですわ」

「…」

「…」

…今、その事を聞いた時に黙り込んでいた二人の目が揺らいだ。多  
分、嫌な思入れがあるのだろう

「だからこそ、お願いがあるのです…」

「…」

「お願いします。…私たちの事を助けて下さい…」

「…」

…そう言うと、頭を下げてくださいをされた。妖怪の賢者であろうも  
のがここまで自分のPRIDEを捨てているのにもかかわらず、俺が  
断るのは無下に思えてしまう。魔理沙も霊夢も驚いていると言う事  
は相当なものを持つていたはずだ。

…だから、言ってみよう。

「大丈夫ですよ、はつきり言って同じ男として許せないんで。」

三人に聞こえる様にはつきりと。

「ありがとうな、お。やっぱり良いやつだぜ！」

「ありがとう、本当にね」

やめてくれよ。そんな顔をされたら泣いちゃうじゃ無いか。二人  
可愛いし。

「…」

…頭を落としたままの紫に近寄り頭をなでる。

「…もう約束をしました。だから安心して頭を上げて下さい、」

「、ええ」

そう言つて頭を上げた時、紫さんは泣いていた。ポロポロではなくポロポロと、

「さて！野菜カレーを作つたぞ！運んでくれー」

「あいよー！」

「私もやるわよー！」

ドタバタと、調理場の方へと向かつて走つて行つた。

「……………優しいわね。本当に、感謝しか出来ないわ……………」

…一人残された部屋の中、嬉しそうな言葉がひびいていた。

To . b e . c o n t i n u e d ,

## 希望の光。――中編2／2――

…幻想入りしてから約2日目。朝は野菜カレーを食べ、昼はカレーパンを食べ、夜は野菜炒めを食べた。この中で一番人気だったのはカレーパンだ。うまく出来ていたのだろう。

――まあ、そんな事よりも、「助けて欲しい」と言っていた事について、今(夜)話している。…昼聞いてみたところ、「色々調べる事がある」と言われたので…夜まで待っていた。  
……、

「ただいまー」

「おかえりだぜ〜」

「…魔理沙は帰りなさいよ、いてもいなくても良いでしょ?」

「おっと、そんな事を言っつて私を追い出すつもりか?それは〜無理だぞー」

「いや、アンタ本当にいらんでしょ。」

「酷いのぜ。皆んなしてか弱い私を虐めるなんて。」

「ハハハッ、それはないわ」

「あーー気づついたらわあ〜」

「――…まあ、それよりも紫?」

「……何?」

「分かってんでしょ?どうすれば良いのかなんて」

「…一様ね。私たちが頼むのだから、それなりには考えて来たわ、」

――皆様なんか切り替えが早いっすねえ、ほんとに。

……後なあ〜そんなの、別にメリットが無くてもやるんだがなあ〜?  
…、…、自分にできる事ならっつて感じだし。

「で、どんな感じなんだ? 私たちも動くのか?」

「――まあ、今から話しますわ」

紫は一息ついて、俺の顔を見た、そして口を動かす。

…、貴方の持つている力は異能力的な物では無いと思います。…ですが、霊夢を変えた言動や行動、それらを駆使すれば大きな力となる。…その力を使えば私たちの気持ちを変えることができるはずで

す。

「――貴方には人を引きつける魅力がある。だからお願いをしました……。―だけども、時間がかかるかも知れない。」

「でも……。でも……」お願いします!!」

「……俺がみた、二度目の土下座。……紫さんの土下座はとても綺麗だ。……多分何度も土下座をしているのだろう。それこそ、何千回も「時間とか、そんなのは気にしてないんです。只々あなた達の事が見捨てられない、だから俺は協力をする。それ以外に理由なんてない」  
「……でも、貴方にはメリットがないのよ、?。」

「メリット?。デメリット?……―気にしてないですよ。俺が二人を助ける事にそんなもの必要ありますか?」

「……諦めな、紫。なんて言おうと効は助けてくれるみたいだぜ?」

「私自身、この人を信じてても良いと思うけど、どう紫?」

「……もう、なんか泣いてるほうがバカらしくなってきたじゃないの……」

「それで良いんですよ。笑ったほうが何倍も良いんですから、ね?」

「そうね」

「そうだぜ」

「もういいわよ……」

「どれだけメリットを探すのに時間をかけ、悩んだのかはわからな  
い。……でも、とても必死な顔をしていた、それだけは分かった。だから、強めに言った「大丈夫だ」と。」

「……―間違った事は言わなかったみたいで、三人の顔はとても良い  
笑顔をしていた。――良かったと思う。」

……

「……それで、まずどうするの?」

「俺自身、妖怪やらがいると言われているから鍛えようと思っ  
ているけど……」

「おっ!、私もそれなら手伝えるぜ?」

「こら二人、まだ話しは終わってないから、座りなさい」

「はい、」

何だろう、この空気の入替えは…まあ、悪い事では無いんだけど、

「今、貴方が言ったとおりで、妖や神などがあるこの世界で生きていくのは難しい。普通なら鍛えるしか無い。…それでも多分難しい筈です。」

「…それは、どうしてですか？」

「人間と妖怪。この差を埋めるにはとても難しい話…例えるなら人がテイラノサウルスに向かっていくようなもの。なのですから。」

うん、そりゃ無理だな。

「だとするならばこちらも対応出来るように「力」を手に入れるしかない。…その力を持ったのが私たちです」

「先ずは私だ。能力は「魔法を使う程度の能力」だけ」

「私は、「空を飛ぶ程度の能力」ね」

「そして私が、「境界を操る程度の能力」ですわ」

三人の能力が、全部ぶつ飛んでるとは思わなかったわ。マジで

「私たちが持っている力と同じ様な力を作り、貴方に授けます。それなら貴方も対抗出来る様になる筈です。」

「…おいまじか？それ」

話しに入らない様していた魔理沙が声を上げた。

「ええ、…その代わり何が手に入るかはわからないけど、やりますか…？」

「それは危ない事、？それならお姉さんにはさせたく無いんだけど」

能力的な事になった途端二人が話します。何か悪い事なのだろうか、はたまた危ないことなのか。

「まあ、やりますよ。危ない事でも、」

「分かりました。」

「二人は見ていて、力に溺れないと約束もするから」

「そんな事じゃなくてな、…はあ、」

「…分かったわよ」

二人と会話をしているうちに紫さんの手には一つの「勾玉」が乗っかっていた。色はとても綺麗な赤、それを渡される。



「触って見てください。」

「はい。」

ゆっくりと手を近づける。二人はそれを傍観していた。それを確認し手で触った、時だった。

「!!」

「……全身に火傷を負った様な痛みが走る。しかもそれだけではなく、体の細胞が蠢いている様な感覚を感じた、それは気持ち悪いってなものじゃない。……でもそれを耐える様に疼くまる体制をし、呼吸を整える。」

「……少し経つと、目眩も取れ体に力が漲るのを感じた。」

「……（ゴクン）」

「……（ゴクン）」

「だ、大丈夫か？」

「あ、うん」

「どんな感じ？」

「うーん、体に力が入りやすくなったけど……それくらい？」

「……私が調べて見ましようか。」

前と同じ様に手を額にくっ付けられ紫さんが目を閉じる。それを

三人は緊迫した状態でまっていた

「……能力は” 侵食する程度の能力” ね……」

「侵食する……」

「程度の……」

「……能力だあ？」

「……」 「侵食」……雨水や川の水、風などが地面や土壌を削り取ること、または他の物質に入り込み自分の物質を混ぜるという意味も持ち、別名「腐食」ともいう。」

「そうね、使い方は色々あるのだけど……戦いや詮索には使い難い能力ね、」

「意味がないじゃんかよ。」

「どうするのよ、もう一回できるわけ？」

「それは無理なの……何故なら無理に龍神に頼んで一つだけ貰えるよ

うにしてもらったんだものだから…」

「え……あの龍神って言った!?!」

「ええ、」

「マジかよ……それなら仕方ないか、」

「?、あの龍神って誰ですか?」

「えーと、簡単に言えばこの世界を作った神様よ。私の神社ではその方を祀っているわね。」

「ーそんな人に頼んだんですか?、」

「頑張りましたわ、本当に…」

相当凄い人の所に行つたみたいだな……なんか悪い事をした様なー……

「おつ、もうこんな時間なのか、じゃあ私は帰るぜ」

「はいはい、またね」

「…じゃあな、姦」

「ああ、またな」

それだけ言うと、笑顔を見せ帰って行つた。

「私も、帰りますわ、お休みなさい」

「はい、俺も色々と考えて見ます……後、この力を貰つことの事の恩は必ず返しますね。」

「ふふ、余り、気にしなくても構いませんよ?」

「いえ、必ず返します。」

「ー…じゃあ、楽しみにしているわね」

「ーはい。」

そう言つてスキマに戻って行つた。

取り残されたのは姦と霊夢。二人がいなくなつてからと言うものというと、喋らなくなりしたを向いていた。…そろそろ眠ろうかと考えていた時、

「ねえ、」

ー…霊夢が口を開いた。

「何かな?……」

「貴方は辛くないの?…私たちなんかを助けて、時間を無駄にし

て、」

「…紫さんと似ている事を言うんだね。」

「…答えてくれない?…」

「うーん、なら逆に聞こうか…もしも俺が魔理沙の事を攻撃したり襲おうとしたら霊夢はどうする?…」

「…そりゃ助けるわよ。でも貴方は他人でしょ?…」

「そうかなあ、でも、それなら霊夢達は優しいんだね。」

「何で…そう思うの?…」

「…赤の他人である俺を心配してくれたでしょ?さつきさ」

「…!、確かにそうだけど…助ける理由なんてー」

「…ある。ー何故なら二人共には恩があるんだから、霊夢は俺の事を助けてくれたし、…魔理沙はこの世界で生きる術を教えてくれた。それは立派な恩だ。ならそれに対して恩返しをするのが普通だろう?…」

「……………」

「それにさ、綺麗な女性がイジメられているのにほっとく事が出来るほど俺はヘタレじゃないよ…」

「そう、なのね…全く、貴方は何処まで優しいのよ…」

「俺は霊夢達を助ける。まあ、頼りないかもしれないけどね…約束するよ。」

「約束は破らない?…」

「勿論」

「なら、、、お願いね」

「ああ、任せられた。」

ーそう言っつて目を見つめ、握手を交わした。ー

ー……今思えば、多分これがスタートだったのだろう。

ー……これから起こる…悲しくも、楽しい物語の、

To be continued……

希望の光。 ―後編2／1―

…朝俺が素振りをして分かったこと、…俺はどうにも刀の様な長く半円に曲がった刃を扱うのは苦手らしい。おかげ様で降った途端自分の横にあつた木に刺さり刃が折れた。

…そんなわけで、悔しくなり自分で「木の剣」を作って練習をしている。

「はっ、はっ、はあっ！」

うん、使いやすい。

「コレくらいいいか…時間的に、後、体力的に…」

只今の時間。午前5時を指す…いつも俺が調理場に行き朝食を作ることにした為、これぐらいの時間には少し手を辞めて向かう事になっている。

…何時もならなのだが、

「…霊夢の好きなものとか聞くの忘れてたな、…どうするか…」

…作る側からすると、決まってるものを頭の中で決めてから作るのは少々時間がかかるし、何よりも雑なものができてしまう。

…自分が好きでも作ったものを相手が食べられなかったら意味が無い。しかもそれを考えてしまうと、どうしても被ってしまったり味に執着しなくなる。だから相手の好みを聞いておくだけでも全然違ったりする。…それが出来なかったのは痛い…

「しようがない…まだ時間はある、その間にお風呂を貸してもらおう…」

そう言いながら渋々と部屋を出て行った。

〈調理場↓入浴場〉

…そういえば、何気にお風呂を貸してもらうのは二回目かも知れない、初めて此処に来た時は色々有りすぎて忘れていたからね…

因みに1回目は昨日の同じ時間。二回目は現在進行中。てな感じにしか入ってない……

「…というより、1回目は気付かなかったけど……ここのお湯って温泉のお湯だったんだな、神社にあるとは……」

温泉はかなり広く何人でも入れそうな感じで、胸まで浸かれる深さもある。…とても気持ちが良いし、何より人がいない為満足感も充分にあった。――自分には少し勿体無く感じる程に

「気持ちいいなあ、まあでも、作るものも決めだし出るか、」

……――そう、そう言った時だったんだ――……

「誰もいないわよね、？」

「、ふう、出ようか、」

内側に金髪の女の子が入った時、

それと同時に湯気に包まれながら立ち上がった。あ

……しかもお互いはまだ気づいていない。

「えっ、」

突如として霧の隙間から明らかに知人ではない姿が見えた。…それと、明らかに女性にないものが見えた…様な気がする…。

「ん？、」

そして気付く…この状況を――二人は、気付く…

「……」

…この人は（異性）だと…

「……」

…お互い動かない…そして一歩も動かない……。

「う、うわあああああ!!!」

「き、きやあああああ!!」

今日のこの日の朝この時間…多分生涯一生忘れないと思う出来事だった。……「マル」……

——お風呂からすぐ上がり、脱衣所前——

「ご——ごめんなさい!!」

「あ、えっと、俺の方が悪いですよ……気づかないような場所に服とか置いていたんで……」

普通は脱衣所についている棚に服とかをおくもの。……だが俺は少しぼやけていた所為なのか棚の上に置いていた。

……まあその、実はかなり棚は高くてですね?……俺もギリギリ届く場所に置いたからさ……。 (身長188cm)

「……いや、でも」

「良いですよ、ほらそれよりも……霊夢達に知られない様にしないと……」

一つわかるのは、この状況を霊夢や紫さんにバレるとあらぬ誤解を招く可能性があるということと、……バレた時、この人の命に関わる事が有りそうという事、

……それは駄目だ。後味が悪いしなんとかしよう……。

「あつ、そういえば、名前は何ていうんですか?……俺は朝吉良・ 焔とい  
います。」

「私は、アリス・マーガトロイドです……。」

なんかギクシヤクな関係になりそうな感じがし、慌てて言葉を繋ごうとしようと思った。

……

「えと、それより、先ほどの罰って何ですか……?」

……先にアリスの口からそんな言葉が先に出た。

「…… (!! ) ……」

罰、……。……これは多分、紫さんが言っていた女性の扱いの答えなのだろう。……でもまさか、あんな事だけでそんな死ぬ程怖がる罰を受けなければいけない規則の様なものがあるとは思ってもいなかったが……。

……だからと言って……俺は、アリスに罰を受けさせる気も、俺が罰を

やらせるさせる気も全くない。

「罰?…ハハハツ、…そんなものは要らないよ。」

「私は、貴方を不快にした…それは十分に命を絶つ理由がある事なの…」

「それって、本人が気にしなければ良いんだよね?」

「えっ、うん、まあそうですね。」

「ならアリスが罰を受ける理由はないね。俺自身は気にしてないからさ…まあ、少し恥ずかしかった位だから」

少し近付き、気づかれぬようにアリスの目を見つめる。…その瞳の奥には悲しみと動揺をしている様に感じた。

「…」

アリスの目は無意識的につつとこちらを見ている。まだ、さつき言った事を信じられないのだろう。

「うーん…じゃあアリスは罰を受けたいの?」

「そんな事ある訳ない…」

「なら、どうしてそんな顔をするのさ?罰が無くなって、怖い事が無くなって、良い事ばかりだと思っけど?」

アリスの顔は苦虫を数匹同時に噛み潰した様な表情から顔を変えない。と言うことは…混乱をしている可能性があるということー。

「そうだけど…でも、」

何だろう…この感じデジャヴをととも感じる。…少し脅してみるか、

「ーああああーもう納得いかないなら罰を受けてもらう様にしてもらうよ、?、」

「え…」

ジリジリと近付き、息が感じる程までところまできた。そして、手を思っいつき振り上げ額まで指を近づけると

ー手を手を止めた。

「…?」

「俺はここに来て数日しか経ってないんだ、それでさ…罰としてー何か俺に出来そうな事」ー教えてくれないかな…?」

「、そんな事で良いの…?」

「うん。」

「じゃあ、何を教えたら良いの?」

「んゝ何でも。」

「料理とか、」

「まあ、そうだね…。お願いできるかな?」

「う、うん。じゃあ、改めて宜しく…」

アリスは少しぎこちない手で握手を求めた。俺はそれに対しその手をぎゅつと握りしめる。

「よし!時間もないし、急いで料理作るぞー!手伝ってくれ!」

「は、はい」

「…それと、俺には敬語は無しでいいよ。魔理沙とか霊夢みたいにさ」

「わ、分かったわ…」

「じゃあ行くぞ!!時間がない!」

焔は少し小走りで部屋を出て行った。

「(なんか、とても良い人ね…顔も、良いし…)」

アリスは安心していても良い笑顔のまま、歩いて部屋を出て行ったのだった。

—————

そして俺は今、博麗神社にある本棚の整理をしている。…理由としては幻想郷の事が知りたかったのと、全員の能力の事が記してある本が気になったからであった。

それとアリスと一緒に手伝ってくれると言うのでアリスも一緒に。……因みに。霊夢が何故アリスがいるのか聞かれた(当たり前なんだけど)必死に言い訳をして何とかはなったのだが……今は喧嘩みたいな感じになってる。何で?……

まあ、そんな事があった後にアリスと一緒に居るわけだから、一人の方が良かったと思う……。

「考えてても、しょうがないか。」

ボソツとそんな事を言いながら、本を見て行くのであった。



……一時間後、……

「ねえ、あきさん。」

「どうしたの?」

「いや、見つけたのよ、はいどうぞ」

「ありがとう。じゃあアリスはもどる?」

「そうするわ、…霊夢と仲直りをしないといけないから」

少し不機嫌そうな顔をして、居間に通じている障子を開けて出て行った。

「…後で、霊夢に何か言われそうなんだよな、まあ今はいいや」

そう言いながらアリスから渡された本を開く。内容は、

『平安時代中頃。初代博麗の巫女であった「博麗 桜」と妖怪の賢者である「八雲紫」が主に動き、博麗大結界を作り現世と離れたのが幻想郷。それ故に結界は強く、未だ現世から迷い込むものはいないとされる。…だが十代目からというもの少なからずいるとされている。』  
…と、書いてあった。

俺は、この話を読んでいた時に一つの疑問が湧く。

「…何故、十代目から?、結界が弱まったりしたんだろうか、」

そうそこだ…何かあったのだろうか。…いや、これは紫さんに聞いていい事かどうか分からないので黙ってはおこう。

「まあ、続きを読みますか」

A B C D E F ……

…その本を読んでから数十分後、俺はとあるページで手を止めた。

「この本に一緒にあったんだ、」

それは…みんなが俺に教えてくれた「能力」が記してあるページだった。…全部読みたかった、が…パラパラとページのかずを数えると、一時間くらいは経ちそうだったのでそれを持って部屋を出て行った。

〈書庫↓居間〉

……そして入った瞬間、目を疑う。

「おっ、アリスう、もつと飲みなさいよおっ」

「霊夢もくくホラ早く飲みなさいよ、」

「……（何で、昼間から酒を飲んで酔っ払ってんだ？この二人は……）」

周りには酒瓶が三本程転がっていて、全て空瓶。そして机の上にも一本転がっていて、他にもお掴みの様に置いてある煎餅などがある。……そして。俺が入った事により事態が悪化する事になってしまったのだ。

「あーお姉さんどう一緒に飲まない〜？」

「あ、飲みなさいよお〜飲めるんでしょ〜？」

いや、飲めるかどうかなんて行ってないんだが……って、俺何歳何だ、？覚えてないから分からないんだけど……

「あ、えつと、俺「どうぞー」……はい。」

アリスにあんな純粋な笑顔を見せたら男として負ける。断れないだろ、アレ……

……という訳で、近くに本を置いて、渡されたコップの酒を口に含み、飲み込む……

「……うまい。」

「でしよ〜〜ホラ飲むわよ、！」

ほろ苦く甘い味……そしてスツと入っていく感覚はとても心地良い。

「ありがとう、でも何で昼間に、？」

「いやね、飲みながら話をしようと言うことになったのだけど、何故か止まらなくてね〜」

アリスがそんな事を言ってお酒の入っているコップを手に取り何度か口に含む。……でもこの姿。……差別するみたいで嫌だが、人形みたいに可愛い二人がオヤジみたいな格好をしながら飲む姿はとても異様なものを感じる……。

「、アレ、眠たくなってきた……俺、こんなに弱かったんだな……」

数分も経たないうちにどんどん自分身体が熱くなるのを感じるのと同時に眠気までもが全身に襲い、それに耐えきれなく瞼が下がっていくのを感じた。

「眠い、」

…そして直ぐに俺は潰れてしまったのだった…

…アリスと霊夢は酔っている様に見えるが、見た目程酔ってはいない、何故なら意識はあるからこそ会話が成立する。本当に酔ってたらこんなもんじゃないと自分でも分かっているのか、時間をかけて飲んでみるみたいだ。…だが栞は、自分の強さが分からないままいきなり飲んだのか、身体に慣れていない酒が入った事によって、数分後には机に突っ伏していた。

そして眠っている栞の顔をアリスが笑顔のまま、見つめていると、霊夢に声をかけられた。

「、格好良いでしょ？、、栞って」

「うん、格好良いし。優しい。…それと霊夢は栞さんの事どう思うの？」

「どう…って？何よ、」

「恋、とか思ってたりする？」

「——、え、えつと…まだ、会って3日だけど顔の事で嫌がったりとかしないし、話しをして居て落ち着くから、…私は少し気になっただけ、」

「…私は、出会って数分だから分からない所の方が多いけど…この顔を見ると…とても優しい人ってのは分かるわ」

「…そう。」

博麗神社で和やかに笑って話しをする二人の姿。外側から見たらそれはとても醜く、悲壮の籠った表情なのかも知れないが、でもそれは一般的な話にしかな過ぎない。…お互いや他の人達が自分達を醜いと思えていても、罵倒しあつて泣きたくなる時事がきたとしても、彼女らの希望がある限りそれはなくなる。

その希望は、今は未熟だが…いつしか本当に幻想郷を自分達を変えてくれる存在であるという事を信じている二人は、いつしかその気持ちに分かり合える日も来るのだろうか。

∴それは分からない。

T o . b e . c o n t i n u e d

## 第7話

…赤い屋敷の中の一つ大きな部屋。

血は飛び散り、上半身が無くなっているもの…下半身が無くなっているもの…生気が無くなっているもの…そんなものが散乱している状態の部屋の中。

…目は赤く染まり。

…爪が異様に伸び。

…まるで壊れた人形のように動かなく、表情も読み取れない。

…そんな姿の少女が、その部屋の中に佇んでいる。

…その手に血で染まった赤い槍を持ちながら…。

少女はずっと上を見続ける。

…て！

…お…て！

「…起きて！」

「うわっ!!、って霊夢か。」

「いや、あのね。飲ませた私達が悪かったから、もう夕飯の時間よ。」

「へ?、あ、本当だ」

只今の時刻…8時06分。…あれから5時間は経っていて外はもう暗く染り、星空と月がよく光っていた。

「…悪いーじゃあ今からでも…「作ったわよ」」

「ありがとう。…後それとアリスは？」

「帰ったわ、丁度数十分前に…でもまさか焔があんなに酒弱かったとは思わなくて、ごめんなさい。」

「謝る必要は無いつてば、それよりもご飯食べよう…お腹空いたしさ」  
「…ええ、」

霊夢といい…紫さんといい…人に謝る癖みたいなのがあつて言つて治せないとは分かつているので、その事に対して余り触れないようにする様になっている。

「…ねえ、焔」

「なあに」

「…貴方の能力って一体どんなものか気になつただけど、使った事ある？」

「無いね。侵食って言われてもなあ……使い方とかも分からないし」

…焔の持っている能力は「侵食」。この意味がわかつていたとしても、使えるかどうか分からなく何が起きるか分からないものは下手に使いたくは無いと思つていた…ましてや、この意味をそのまま取るとかなり危険な能力…多分リスクもあるだろう。

…でも。

「…試してみる？俺も、気になつてはいたしね、霊夢がいれば安心して能力も使えるから。今なら試しても良いかもしれないね」

…他に人がいれば問題はなくなる。……しかし

「じゃあ試してみましょ」

「でも、どうやって使うんだろう、検討が付かない」

「……あつ、」

そう。…能力が分かつていた所で使い方が分からなければどうしようもないのだ。かといつて同じ能力を持っている人や、似たような能力を持っている人が近くにいないわけなので、…どうしようもなかったりする。

「色々と試すしかないわよね……」

「そうだね……」

…という訳で、俺たちは色々と試しまくつた。分かつた事は少な

かったが、…とても強い能力というのは分かった。

…まず一つ。…手の力を抜き、物に手を伸ばす事によってそのものに対して意識が移り、自由に動かせるという「憑依能力」。

…二つ目は、触る事を条件にゆ元に力を手に込める事によって削れる。「削除能力」。

そして最後に…：自分自身が水に成れる「水鞠能力」の三つ。

…これを見た感じではとても強く見える。が、ペナルティも多く体力の消耗がとて激しく、使いこなすには時間と体力作りでもしなればならないと言う事が分かった。

「…はあつ、はあつ、疲れた」

「まあ、あれだけ試せばそうなるのは分かっただけだよ。大丈夫、？」

「…いや、ね。分かった事の方が多かったから良かったけど、一番疲れたのは水になるやつかな…体の体型無視してなった訳だし…」

…あれは、念じれば何とかなると思った時に全身に念じた能力。その能力は体が凄く軽くなり、動けばチャプンと音が鳴る事他に、霊夢が触ろうとすると摺り抜けたら、体の形を変えることも出来たりする。

…だがやはり体力がなくなるのは早く、元に戻ると立眩みに近い症状になったり、水分が抜け落ちた様で、水を必要とする事を考えると余り使い勝手は良くなかった。…だから、今はなるべく使わない方が良いと言うのは分かる。

「…まあ、この能力は余り使わない事にするとして…：霊夢、一つ聞いていい？」

「ん、何？」

「…突然何だけど、この家の収入源ってあったりする、？」

「な、何で、？」

「…いやあね、料理を作る材料とかを買いだめだけ…：お金自体見た事なくてさ、…気にしてたんだ」

「取るつもりなの…？」

「取らないよ!？」

「…無いわ。…いつも紫から一カ月分の食料を置いてもらってるだけだから」

「…そうか」

「聞いてどうするの、？」

「聞いて?、今の霊夢の行った事でどうするか決まったよ」

「??」

「働くんだよ。俺が、…そうすれば紫さんの負担もなくなる訳だしね。後は体力作りにもなるから丁度良いと思うし」

「…ええ?」

《働く》…というのは選ばれたもの達の仕事。

物を作るものも建築するものも全て…「??」というコミュニティの中に入れる者達の中。

…じゃあ「??」というコミュニティに入っていない者達…つまり彼女達はどうなるのか?

「…………無理。」

「え、？」

「……………あつて、幻想郷の事。どれ位知ってる、？」

「あつ、えーと…妖怪と人間が共存している世界、事位かな…後はお面の事とか、」

「そう…じゃあ、それ以上の事は聞いたりしてないのよね、？」

「まあ、そうだね」

「…なら、それ以上の事を教える。前から気になってたんでしょ?この仮面の本質を、」

「…うん」

「なら、話を聞いてたら解るはずだから。…一から説明するわ」

「…………この仮面は「人里」に入る為に人里からのだされた条件。人里というのは妖怪が殆どいない人間の町…じゃあ何故に仮面が必要とするのか、それは「顔を隠す」ため…。一定を超えた顔になると仮面を付けなきゃ外には出てはいけないというのが「義務」を人里の住民がつ



けたから。

…そして、仮面をつけるという事はこれは即ち「死」…を意味する。  
…何故なら、外見が気に入らないとなれば利用価値の無い私達などには意味のないもの、しかも…外見が醜いとなれば《忌み子》の可能性が高いの。

…だから

追放する。」

「…!?…」

…紫さんの話を聞いていたからある程度は分かっていたつもりだが、隠されていた事の方が多かったのは驚きだった。…でもそれ以上に驚いたのは話の中の…人里から追放するという所。…聞いていてそれらを普通に行う人里の人間というのは、何処まで外見での決めつけで酷い扱いを受けさせるのか。

「…忌み子、それは「能力」を持った「女性」。男は持っていないも特に敵視したりはしない…だから女になってしまった事を恨むばかりの子が多い。

…そして…焔が言っていた《働く》というのはあくまで一部を除き女の仕事。しかも働けるのは「人里にいる女性のみ」。

二度目のカルチャーショックを受けた。…何で女性? 何で人里だけ?、と。言われた事に対し、疑問符が頭の中を飛び回る。

…そして女性のみという言葉を聞きたせいか、我慢が出来なくなり…

「…男は何をしているんだ?、」

…言葉が溢れてしまった。

「……分からない」

「…後、もう一つ、…こんな事を聞くのは悪いんだけどさ…」 仕返しをしようとかは思ったりしなかったの、?」

「……」

…霊夢は目を下に向け黙ってしまふ。明らかにこんな事を聞くのは失礼だと思うのもある。だけれどそれ以上に俺は顔に出してしまう程の怒りが強く、自分を抑え切れない気持ちがあつたせいでもだつ

た。

「ご、ごめん…霊夢、余りに、失礼過ぎた…」

「……ったの」

「へ？、」

「……怖かった、の…」

…そう言った霊夢の目は俺に虚ろな目を向け、手は小刻みに震えていた。目は一点に集中し、顔は少し青白く、口が少し開き揺れている。悲哀の表情を浮かべたそんな状態。

…でも、そこよりも俺は驚いたところがあった。

それは、霊夢が男や俺に対し恐怖心を持つていたという所。…かれこれ3日間を一緒にいたが、そんな態度を俺にはしなかったし見せていなかったと思う。

…だけれど…普通に考えてみれば、直ぐに解る事だったのだろう。

…いつもは強気な態度を見せて、強かった博麗霊夢。

…でも、それでもこの子は一人の…

「女の子」なのだと。

…そう分かった途端、机越しにいる霊夢の姿がとても幼く可愛い女の子に見えた。この子が男を怖いというのも無理はない事は、異性関係の話の時に分かる筈だった。でも、その時は気づかなく普通に接してくれていると思いきみ、霊夢の気持ちの本質を見抜けなかった所がある。

…そうなれば、俺にも罪があるのではないだろうか？

「…ごめん。俺の事が嫌だって事が気づいてあげられなくて、…だから、その、明日はここを出るよ…」

嫌な奴と苦手な奴にはいて欲しく無いのは当たり前だろう、怖がってる奴というなら尚更だ。だとしたら、俺が今出来る最善の策は「出

て行く事」。その後の事は後に考えればいい。

「……」

「……」

私は黙る……どうしていいか分からないから。

……私は魔理沙と同じで男が苦手。出会えば物を投げ付け、お金を盗られる、……そんな事をされているうちに男が嫌いになった。

自分の母親は村から虐められた所為で数年後に「自殺」した。私は紫に引き取られ、今は巫女としての才能があると言われたからことで虐められる事が無くなった。

……男は許せない。顔だけで判断し、綺麗だったら欲しがらる。……私達の様なものには只働きやストレスの解消にしか出来ない。

……だからこの男が倒れてるのを見てほっておくか、私のものにしようとした。人間がここまで来て、一人で帰るのは無理。……だからこそ弱みを握り自分のものにしてしまえばアレやコレさえも出来るだろうし、チャンスだと考えた。

そして家に持ち帰り、目を覚ますまで只々じっと待ち1時間が経つた頃。

「（早く目覚め無いかな〜）」

内心はドキドキする。……これからアレが出来るし、何よりその相手がこんなイケメンだとしたら誰だってそう思っても仕方ないだろう。

そして一度外に出て、やる事をやっていると、彼の声らしきものが聞こえたので部屋の目の前まで立ち少し息を吹く。私の顔を見たらいつも通りに叫ばれるか、もしかすれば家の中から飛び出して行くかも知れないと言う所を考え、動きを封じる札を持って行動を開始する。

案の定、彼は起きていた。

そして、軽い挨拶をこちらからかけると、

「え…はあ、おはようございます、？」

…困惑した表情で挨拶を交わしてくれた。…何故だ？、普通は見た瞬間に表情が青白くなり逃げまわろうとするか、意識が飛ぶのかの二つの筈だ。

だけど思っていた反応とは違く、挨拶を返しただけ。いつもは逃げられる筈なのに、逃げない彼を見て不審に思い。

「あら？私を見て逃げないなんて対した度胸ね？」

と、返した。…この時に既に少し赤くなって息が荒くなっていた事は自分でも分かっていた。理由は、「逃げない」という所の驚きと、起きた時の顔が凄く綺麗だったからである。

そして、赤くなっていくのを隠し切れずに話していたのか、

「大丈夫ですか、？」と声を掛けられ、顔が近くにあつたせいかわれ照れてしまい、焦りながら話していると、

…記憶が飛んだ。

…自分でも何が起きたのか分からなかった。でも凄く心地いい気分になっていたのはわかる。

…男の人に対して嫌な感情が薄れた気がした。だからこそ、この人は出て行かしちゃいけない。…自分が変われる気がするし、何より彼を気に入っている自分がいるから、この人なら私達を良い方向にしてくれる筈だと思うから。

…私が、決意を決める。

t o . b e . c o n t i n u e d . . .

i g o rとの出会い。

暗い中、焔たちはただただ黙る。今の空気は余りにも酷く、空気の悪さで子供たちなどは居られない程だろう。

霊夢は黙って下を向き、焔は鬱いた表情で空を見上げている。

そしてその何十分、何時間と経っていない筈の時間がとても遅く思えた。

遂に口を開く。先に開いたのは、

「ねえ、」

霊夢だった。

「どうしたの?、」

「今から本当の事を言うから。もし、もしも嫌だと思ったら出て行って」

「……分かった。」

「……うん。お願い。」

——私はね、本当は男が大っ嫌いなもの。

「……………」

「なぜなら、私から勇逸無二の母親を奪ったから。そして、それさえまでも牢獄のような収容所に入れられてた。…本当に嫌だった、殴られ、蹴られ、罵倒されていた私は逃げようと思ったわ」

「——でも、逃げられなかった…いや、逃げる事が出来なかった。逃げる度に捕まえられ殴られたから。そうしていると、段々と私中で恐怖が強くなっちゃって、最後には抵抗しなくなつたのよ」

「だけど負けたくなかったから、私は言葉だけでも反抗し続けたわ。」

「……でも、力を持った今も、逆らえない。…怖い、から、」

霊夢は、力強く最後まで話を続けていた。何故、まだ会って1週間しか会っていない俺に対してここまで…。

だが、ここまで言われたら聞きたくなくなることもある。

「ありがとう霊夢。ここまで話してくれて、だけども俺には教えてくれたんだ？ 漢が嫌いなんだろう？」

そう、出会ってまだ一週間にもなっていないのだ。それなのにここまで話すのは、優しいを通り越して不自然に感じる。

「…信頼できる人だと思っただからよ、顔だけで判断する人じゃなかったし、あの時だって嫌な顔を一つしなかったから。」

「…………じゃあもしも、今俺がここを出て行ったら霊夢はどうする？」  
「…其れも覚悟の内よ。」

霊夢は気づいていないだろうが、声が小刻みに揺れていた。怯えているのか、それとも……

「俺は出て行かないよ、家がなくなるのもあるけど、何より命の恩人に恩を仇で返したくないからね。…だから、霊夢安心してくれ。俺は、お前の味方だ」

「うん、うつつぐん、」

「…だから、泣きたい時は泣いてもいいんじゃないかな、？」

俺は、霊夢の顔を見てしつかりと声を発した。

「あゝあゝ ああああああ、」

そして、霊夢は泣いた。しやがみこみ、下を向いて。

多分だがあれは怯えていたのではない、強く見せようとした虚勢だったのだろう。

たった一人の大切な友人の為に。

博麗霊夢：ランク1↓ランク4

---

「―落ち着いた？」

「うん、」

「ほら、お面を外して置いておきな？ 明日困るんだろう？」

「うん」

うん。

としか言わない霊夢だが、先程よりは声は震えていないし、涙も乾いている。目は真つ赤に腫れてはいるが。

「、なんだが私、前より口軽くなってるのかなあ、」

いきなり顔を上げ、発した言葉に少し戸惑うが、焔は少し考えた顔をしながら言葉をかえす。

「何でだ？」

「、いや、私はこの事余り聞かれても答えなかったのに、今は答えたから。」

「信用しているから、じゃないのか？」

「うん、そうなんだろうけどね、」

「…まあ良いわ、焔はもうすぐ寝るんでしょ？お風呂入る？」

「いや、良いや。霊夢は入ってきたら？涙を流して疲れてるだろうし」

「ありがとう」

「あ、ああ。」

霊夢はそのまま部屋から出て行った。そして、最後に見た笑顔には抵抗と悲しみの無い様だと分かったのは後々の話。

あの後霊夢と別れ、布団を引いて横になっていた。朝から干していたのか、ほんのりと暖かく匂いが良い。霊夢がやって置いてくれたのだろう。

そして、数十分経たないうちに、俺の意識は闇みえと消え去った。

「……………」

何処からか、声がする。

「……………」

なんなんだ、この声。

「ーお客様!」

「は、はい!」

「やつと、お目覚めになりましたか。」

「何だ此処。周り全体が真っ青なんだけど。もしや天国かつ!」

「ーいや、ないな。うん」

「……お客様」

「あ、すみません」

「まあ良いでしょう、こほん。」

「ーようこそ、ベルベツトルームへー」

「ベルベツトルーム?」

「はい。そして、貴方様はこの部屋のお客様ということです。」

「はい?」

「いやそれよりも、いきなり此処に居ることが聞きたいんだけど、俺は。」

「此処は精神と物質、夢と現実の狭間にある場所。それがベルベツトルームにございます。そして、私はこの部屋の主人でイゴールと申します、どうぞお見知り置きを。」

「はあ、ん、夢と現実?じゃあ、俺の体は大丈夫なのですか?」

「はい、身体、精神共に異常はきたしません。」

「…良かった。」

「ただし、私達に触れてしまうと今の状態が保てなくなり、魂が消えてしまう可能性がございます。くれぐれも近づくことのないよう、」

「分かりました。」

「イゴールと名乗る老人はそれだけ言うと、すぐさま俺に向けていた目つきを変え、最初のなんとも言えない表情に戻る。」

「さて本題に入りましょうか、貴方をここに呼んだ理由は二つありま



す。1つ目は貴方に隠されているもう一つの能力について、二つ目は、貴方がすべき事の確認です。」

「、しかしながら時間がない。そして貴方と会えるのはこれが最後となりましょう。どうするかは貴方次第、」

それだけ言う黙って俺の目を合わせた。

だがしかし、ここは慎重にいきたいところではある。焦ってはいけない。

「後どれくらいありますか？」

「3分くらいでしょう。」

無理だ。

「ーどうすればいい？」

「ーどつちにすれば？」

「……………」

知ってる天井だ。

「馬鹿なことをしてないで起きるか、まあ、それにしても、もしあの夢の話が本当なら凄いことになりそうだ。」

少し悪い顔を見せているのだろうと、それは自分でも分かっている。それでも好奇心に似た何かには勝てなかったのだ。

「さてと、朝の仕事に入りますかね。まずは…洗濯からか、料理からか、というか今何時だ？それによるけど、」

そんな事を今考えてるわけにはいかない。そう考え、俺は今日の仕事に就いたのだった。

1時間後。

「よつしや卵焼き完成つと、洗濯も干し終わってるしなあどうするか、まだ朝の5時だし。あとやる事なんかあったっけ？…あーそうだ短剣の練習でもしておこうか。」(自分の私物しか洗濯してません。)

30分後。

「霊夢が起きるかな、でも昨日ので少し会いにくいんだよねえ。」  
昨日の会話をよく聞いた後ならわかる。どれだけ男たちに対して嫌な感情を持っているかを。それでも、自分を信じてくれた事に感謝をしながらも、その会いにくさは変わってはくれなかった。

「これからか、本当の信頼を得ることが出来るのは。それとも、」  
俺はそれだけを口にして、止め霊夢のところに向かうのだった。

To be continued.....

## 主人公組の絆と一筋の希望

「おーい、い、」

…誰か私を呼ぶ声がする。

その声は凜々しくて力強い声だった。

「おっきロー。」

その声の主を知っている分、声が出しづらく、ベビに巻きつかれたような束縛感が身体全体を襲う。

まあでも、こんな軽い挨拶をしてくるとは思わなかったわね。

---

あの後、自分はそのまま霊夢の部屋に向かった。何事もなかったと思うが、なんか虹色に光るオーブは見えたと思う。

…き、気にしないでおこう。(精神的に大変になるし)

ーーそんなわけで向かっていったは良いものの、

…起こしづらい。

けして霊夢が悪いわけではない。あの霊夢の話が真実であるのだとしたら間違はなく人里という場所の人間が圧倒的に悪。だが、その話を持ち出したのは他でもない(自分自身)である。

(でも、霊夢が泣いた姿は可愛いかった)

とはいえ、起こさないわけにはいかないので…

「霊夢さーん。朝ですよー。おきロー。コケコッコー」

と、言っただけよう。

「すいませんでした。」

「……………」

本当、本当に突然だけどすまない、今見ている人達何があったかと思うでしょう…あの後ね、ふと気になってお面を見ていたらさ、バランス崩してしちやっただよ。

…床ドンを。

「…いやー。まさかだったからさ、そろそろ機嫌を直してくれませんか??」

「…………で、起こしたのは何だったの?」

「(切り替え早いな。)ーあーまあ、そろそろ朝だし朝ごはん作ってあるし食べてもらおうかなど。それと、新しい能力を見つけたし」

「へー。新しいの能力を見つけたの?」

「まあね、、というか霊夢もなんかすつきりしてないか?。」

「…あれだけ泣けば私も落ちつくわよ」

「そうじゃなくてさ、なんか落ち着いた顔をしてるから。いいことでもあったのかなど。」

「…顔?今、私お面つけてないの?」

「うん。つけてないけど?」

「…え?」

「え?」

霊夢は自分の顔をペタペタと触ると、だんだんと顔が赤くなったり青くなったりし始めた。(可愛い)

「うーん。初めて見たけどやっぱり霊夢って可愛いよね。お面の時に

抱きついてきた時は分からなかったけど、泣いてる時に少し見えてたからどうなんだろうとは思ってたけどさ。」

「…醜いとは思わないの？みんなは気持ち悪すぎて吐く人だっているのに。」

「まだいうの？俺は全然そんなことは気にしないってばさ。なんなら、もっと言ってあげようか？可愛いって。」

「…いきなりそんなこと言わないでよ。」  
「ほっほほーい。」

ーこんな他愛の無い会話が続く。それだけで俺は嬉しく感じた。どこか安心したようなそんな気持ち、そしてその中に新しい感情が芽生えてきていることに薄々感づいてきているのが分かった。

ーこれは「喜び」だと。

いきなりこんな感情が出てくるのは有り得ないと思うが、もしかすると昔の俺が感じているのだろうか。普通は楽しいという感情は誰でも知っているものの筈なのに、俺は知らなかった。

なんなのだろう

……

「やっぱり美味しいわね。ありがとうあ」

「どうもですよい。」

あの後すぐに料理を持ってきて食べ始めていた。最初は重たそうでちよいと複雑な顔を見せていたが、食べたらすぐに変わった。（腕には結構自信があるんでね。よかったよ。うん。）

「ーあはこれからどうするの？」  
いきなりそれか。

まあ、いいけど。でも、これに関してはなあ、少し悩み所なんだよね。霊夢みたいに男に対して怒りを持っているやつを男が近づくのもどうかと思うしな。魔理沙もそうなら魔理沙を助けてあげたいのもあるけれど、そんな簡単に人の気持ちなんて変えられ無いし、難しい。

「…うん。紫さんには悪いけど少し幻想郷巡りは後にして、魔理沙と霊夢と話していたいと思ってる。」

「…そうなんだ。だとしたら、私も最初は何か盗もうとしてたから、魔理沙もそんな風に考えてるかも、気をつけて、」

「(まあ、本当は霊夢が心を開いてくれるのを待つのが一番の理由でもあるんだけど、) 霊夢、昨日はありがとう。話してくれたのは凄く嬉しかったよ。」

「と、突然何?」

「いや、お礼を言いたかったただだよ。」

「それなら、」

霊夢が手を差し出す。その手は少し震えているのがすぐにわかる。それでも、差し出す勇氣を持った霊夢は自分からみても凄いもの。尚更無下にはできない。

「改めてよろしくね。」

「(ちら)そ

「一荔」

「一霊夢」

人というのは間違いをおかす生き物だ。生かして次に間違いをしないようにすることをできる人間とできない人間がいる。だがしかし、集団意識というものがあり、それが一般的に間違えていれば人は種に染まるといいうように、間違いしかなくなる。

何が言いたいかというと、今の幻想郷にはそれが存在しているように感じるのだ。

「――女性を差別化する。これはまさに先ほど言った通りである。平等という世界に差別化などはあってはいけないもの、それを集団意識で間違えていないとこの世界の住人は考えている。」

「――果たしてそうなのか?」

「――顔一つ才能一つで区別していいものなのか?」

答えは「否」だ。

ならば。

ならば。差別化されていない人間が世界を。狂いに狂ったこの世界を変えるべき必要性がある。

…でもたしかに、焔がやる必要がないかもしれない。

―だがしかし、

―男がっ!!

―泣いている女の子をほっておけるのかっ!!!

―助けを求める声を無視するのか!!!

答えは「否」だ!!

…それに、彼は一つとして。絶対に持っているものがある。それは決意だ。

または頑固だとも言えるが、固めた決意はもう彼は変えない。彼が強くなりたいというのであれば本気で強くなるまで努力するだろう。

…それが自分の本質であろうと。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9

9……………

…あれから1週間が経とうとしていた。魔理沙が来たこともあるが、前と変わらない雰囲気のまま帰っていくことが多かった。

霊夢と話し。魔理沙と話し。楽しかった日々が続く。その中で霊夢は何故かだんだんと、話し方も砕けていき、魔理沙に「なんか変わってないか?」と聞かれているほどであった。

具体的には言葉では言い表すことが難しいが、強いて言うなら自我をとり戻しているような、そんな感じだった。でも相変わらず自分のことは卑下していたが。

そんなこんなを過ごしていゝ週間目の朝のことである。

朝から魔理沙が来て、朝ごはんを食べさせてくれと頼んだ時のこと。

「…うーん??。なんか、体が重たいわね、」

「どうした??」

「いや、なんでもない、」

と、足を踏み出そうとした刹那。

「わあっ!、」

「おっと!!」

足がもつれたのか倒れ込んで近くにいた焔の身体によしかかった。

「一体どうしたんだろ、」

「ちよつと霊夢すまんお面外すぜ。」

魔理沙が偶然にもいたため、お面を見えない程度に外し頭に手をくつつける。

「…熱いな。風邪か?」

「そうなのかなー、、」

「布団敷いてくるよ。霊夢を任せた。」

「おうよ」

幸いにも起きてすぐだったのか、布団は敷かれていた。少し布団の位置をずらした後魔理沙のところへ向かう。

「敷いたから霊夢を頼む俺は一応氷水とか作って持っていくから。」

「ああ。わかった。」

「…あり、がとう、二人とも、」

どんどん顔が赤くなっていくのに気づく。このままだと霊夢は倒れ込んでしまう。急ぐべきだと思い、魔理沙に任せて氷水を作り厨房へと向かった。

……………



「……………すう」

なんとかしてかき集めた氷水をビニールに包み、その下に布を引いて頭を冷やしている。

「…よかった。危なかった」

熱を出した霊夢を落ち着かせれたという気持ちが高鳴り、本気で思う思い安堵の息をつく。

「ちよつとこいよ。 焔」

…その時。俺を呼んだ魔理沙目にはこの世のものとは思えないような目でこちらを睨んでいた。

まさしく、「狂人」のような、そんなような目で。

「……………どうしたの。」

それを言った途端。

……何が通った。そして顔に鈍い鋭い痛みが走る。弾幕だと思われる、。

「…どうしたのじゃあないだろ??お前なんだろ。 霊夢をあんなにしたのはさ」

「…そのどうしたのは霊夢に対してのことじゃない。魔理沙の豹変したのがどうしたのって聞いたんだ」

「へえ、初めはさ私は全て演技してるのかと思ったんだよ。 霊夢はそれが得意だったからな。 そうだろ?だって最初の仲よさそうにしたのは演技なんだからよ。 …でもよ、あんなに幸せそうな霊夢は初めて見たんだよ!!」

「…それが?」

「……………本当なんなんだよ!!男なんだろ?!醜いから私達を憎んでるんだろ!?!なんでそんなに優しくするんだよ!!」

「…初めは奪ってやろうと思ったさ、!、持ち物から何から何までな。

「だけど、この1週間を見てみるとそんな気すら起きねえ、」

「まさしく霊夢の言った通りだった。まさか、あんなに協力的な魔理沙であつてもという悲しみが生まれてくるが、こんなに心を汚した人里の奴が一許せなかった。」

「なんで、なんで妬みみたいな奴が他にもいてくれないんだ、」

「魔理沙……」

「…私は男を信じられなかった。信じたところで裏切られるだけだったからだ。だから、こんな世界いても仕方ないと思つて、し、死のうと思つてたんだ。」

「……………」

「もう訳がわかんないぜ、、何をしたらいいんだよ……」

「言いたいことあるからちよつとキツイことを言うよ。」

俺だつて人間だよ。ましてや霊夢や魔理沙みたいに強くなつてないただの普通の人間。そんな人間だつて出来ることはあると思う。何をしたらいいかなんて誰にもわからないし、自分がわかつてないなら尚更だと思う。

でも、今は霊夢が大変だ。そつちを助けてあげるべきなんじゃないのかな？」

「魔理沙。俺は君の気持ちはわからないけど、死のうとは言つてはいけない。大切な友達が親友が。「霊夢」が苦しむことを考えたらわかるだろう？」

「確かに、な。」

「そうだろう？それに何回も何回も言つてるけどさ、俺は顔でなんて決めないよ。それに気づいて無いと思うから言うけどさ、？」

「お面外れてるよ」

なんなんだろうね。みんなが怒っている時つてさ、めっちゃお面が動いてるのか、外れてるんだよね。…気づいてないけど。あ、魔理沙の顔が林檎になった。

「!!!、はあ、なんなんだよ。…なんかお前と会つてから私の感情が

変わりそうだけ。」

みんな最近めつちや態度を変えるのにはなんかあるんだろうか。この前の霊夢といい、魔理沙といい。なんか可笑しいところがあるよ。うな気がする。」

「まあ、とりあえずは霊夢が良くなるまで少し待ってみようか。幸いにも薬はあるみたいだしね。」

「そうだな。……本来なら永遠亭に行くべきなんだけどなあ、生憎あいつらは男を毛嫌いする最悪の差マッドがいるから、永遠亭入れないかもな」

え?!そんなのいるん? というか、本当男嫌い深刻なんだな。

「あとは、私が行く紅魔館だけでも、うーん、。」

これもダメなパターンだな。

「あとは妖夢のとこだけか、まああそこはそこまで毛嫌いしてないし大丈夫だけど、あんまり行っても意味ないし。」

……どこも無理ってことがわかっただけありがたいわ。

「…それとさ、霊夢が楽しそうなのは効があるからなのかもな。私には分からないぜ、。」

この子も一人の友人のためにしたことが一番大切なことなんだろう。やっぱり、みんながみんな強いわけじゃないのが分かる気がする。こんなことを言われてもオレは何を返したらいいかわからないけど、

「魔理沙、俺は約束を破らない。だから紫さんがいったことを絶対に成功させる。魔理沙がどう思うかはわからないけどさ、みんなを助けてあげたい」

「…くさいなあ。まあ、わかったぜ。私は効をしんじてみるさ」

「ありがとう。」

「おうよ、だから頑張ってくれよ、?。」

「ああ。」

「——もちろん。」

これで霊夢が熱で横になっている最中、魔理沙と仲良くなれたと思う。同じ目的があったからこんな話できたわけだし、こんなに心配な声をかけられたんだろう。

魔理沙と霊夢。仲良くなるのはまだまだ先かもしれない。

t o . b e . c o n t i n u e d . . . . .